清く正しく美しく

八塚一青

前稿で「滑稽俳句」と「川柳」の繊細な二刀流と書きました。この滑稽俳句と川柳の違いについては誰しもが疑問に感じる一つでしょうから、自分なりにもう少し考えてみたいと思います。

滑稽俳句協会が「俳句に滑稽を取り戻し、後世に引き継ぎます」と滑稽宣言をしているところからも分かるように、現在の「俳句」の主流には「滑稽」が失われています。「滑稽」とは辞書に「**笑いの対象となる、おもしろいこと**」とありますが、ではなぜ俳句から失われてしまったのか。それは「笑い」＝不真面目という、じつに生真面目な感覚が作用しているからだと思います。「俳句」を立派なものにしたい、見せたいと思えば思うほど、俳句は真面目な格好をさせられてしまう。果たしてそれで俳句自身は喜んでいるのでしょうか。のびのびと自由に生きている弟の川柳のことを羨ましいと思っているに違いありません。そもそも「笑い」とは何でしょう。私は「笑い」には品質があると考えています。上質な笑いもあれば、下品な笑いもある。一括りに言うことはできませんが、私はとりわけ上質な「笑いは詩である」という持論を持っています。何もないところから、パッと笑顔が咲いて消える。打ち上げ花火のような詩情が「笑い」にはあると思っています。

ここで私が考える「滑稽俳句」と「川柳」の違いを述べるならば、句に取りあげる「笑いの質」だと考えています。兄である「（滑稽）俳句」は、季節感溢れる丁寧な暮らしの中で見つける、小さな明かり（笑い）をモチーフにしており、弟である「川柳」には社会風刺や駄洒落等どんな笑いも受け入れる度量の広さがあります。私はこの「滑稽俳句」の古き良き慎ましい生き方に魅力を感じてなりません。けして羽目を外さず明るく綺麗に詠む。清く正しく美しいものは必ず後世に引き継がなければなりません。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

さて、「詩」と「俳句」についてさらに考えます。俳句は世界一短い詩と呼ばれており、一見、手軽、簡単に見えますが、実はその逆で短いが故にとても難しいものです。同じポエジー（詩の種）を表現する際に、言葉を重ねる方が分かり易くなることは当然のこと。明治二十九年に詠まれた子規の詩（当時は新体詩）を紹介します。

「白菊」

雪洞（ぼんぼり）とりて縁側の
夜寒に立てば、末枯れて
何もなき庭の片隅に
白菊白く灯にうつる。
籬（まがき）の外はうばたまの
闇より暗き上野山。
杉の木立に星落ちて
隠隠とひびく鐘の聲。

この詩には次の句が添えられています。

しづかさや月代上る森の上

いずれも同じポエジーから生まれたものですが、詩の形式の方がより分かり易く写実絵画の趣があります。子規が提唱した「写生」を十七音で行うことは、じつはものすごく難易度の高い技術だと分かります。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。